sub-subspecies

ちょっと違って、なんか違う

押しなべた綺麗事に標榜する泥

束にした花を春にたとえるような内省的な季節に言い残すことなどなく
そのうぬぼれた鑑賞の足もとでぼくら
ひとまとまりの泥水として一縷の暇へと浸る
言い分はよく聞いた
言い訳はもういい
薄汚い見目に反射してその花束
春のような恥じらいと破滅をひとまとめにして散っていく
無様。
笑いはしない
笑えもしない
車輪に割られた笑顔を笑いもしない我々は
泥もかすかに
はにかみもしない

切り抜いた
メディウムで
青を育む

余白に水圏インビトロ
押し寄せたメディウムの構成わからない
波かき分けて足指浸し
浚った波涛に過分配
夥しい粗砂利の積算方
ほとんどなし得ない邂逅に
膨らんだ泡身を摘まみ上げ
　一生に一度
　　一斉に波をはく
群方の野岸に朽ちた流木
かたや海岸線の表面張力
引き寄せあう私史と潮
緊張と安寧の
クロマトグラム

同衆、偏光、過信から遠ざかる避雷針

空に瘡蓋

秋に風

雲の晴れ間に土砂降れて

また言い澱むのかパラフレズ

不治の裂傷、空を駆け

言わぬが火花の稲光

会苦不言

黙したままで

ただ雷鳴は遅くぼくに届く

冴えた閃きだけが

まだ

目蓋をかすめて残る

私に日差し
眼差しで
また幾度かの夏を見送る

寝覚めから汗みどろ
風鈴のアラアムが
涼やかに告げる朝寝坊
ミント、歯磨き、早々に
蝉の音に急かされながら
自転車で風を左右にかき分け
待ち合わせの7か8月
２３日の木陰で
お待たせって、
最初にいう夏

蓮っ葉なきみのすきっ歯に
いつまでも挟まってるみかんの切れ端
一日に何度も歯をみがいても
本音をいわなきゃとれないよ

みかんは空を飛ぶ？
飛ばない？

答えてもいいけど
答えたらちゃんと
答えてね

うなだれ頭上
炎天下

拳も銃も握ったことない
ぼくたちを笑った

歩きタバコのババアは
最高にロックだった

極望の遠近から隔たった生活

白日の
昼星に寄せたひとり言
どんなに体をうずめても
微生のものには届かない
霞外は遍く際立って
間際に逆立つ囁きは
立つ瀬もなければ寄る辺もない

　不安と不安で膨縮する
　語ることすら道断の
　遠近、厭世、生活費
　数えた小銭と天秤皿
　勘定をする片手間で
　明日生きるため
　本を燃やして
　飯を炊く

拗ねていた砂
脇目も振らず泣きわめき
波のしじまでふて腐れる
既にわがままに描いた曲線は
波線状の窪みに流水を生み出し
かたや風媒により堆積する砂山
精巧に積み上がった粒子の繋ぎ目に働く
水の引力が
その牙城を堅牢に保つ

さて、突然の犬
群れ立つ夜の毛並みに星明かりを着流し
流木の傍らの海星を咥えて体毛に纏う水気を
最小限の胴震いで散らす
幾千もの水滴は霧状に宙を結び
降り落ちる星光の進行を阻んで散光
乱れた星の整列により本来の骨格を崩した星座
まばらな光りが点灯するばかりの夜空に
突然の犬がひと吠えすると
流ながれ星ぼしひとつ
突然の犬、突然　追いかけて
いってしまって　ひと気なくなった空の
隙をみて　す砂な　み水ず　ほどいて
欲ほしいままにち散らばり
すい水めんに　　、　　面
も様ようをく組んで　　模　　浚
はしゃぎたてるも　　燥　立　。
みるものおらず　　見　　者　、
やがてなみにさらわれてててててててててててててててててててて

波。